

2016年
7月1日
No. 97
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり



イラスト 高津達弘



会報は札幌市さぽーと
ほっと基金 木村弘宣ひ
まわり基金の助成によ
り作成されています。

Index

- 2ページ LPF活動報告
盛夏の三角山→大倉山散策地域めぐり登山 ほか
- 3ページ 札幌市オンブズマン活動状況報告書を公開 ほか
- 4ページ 活動紹介ーとまこまい若者サポートステーション
- 5ページ 特集:夢をかなえるメディア事業所 ここりカ・プロダクション
- 6ページ 当事者が語る家族のあり方／質問 Q&A コーナー
- 7ページ ひきこもり地域支援センター無料相談会のお知らせ ほか
- 8ページ こちら事務局／編集後記

新たな二つの助成金事業が決定する

2016年度北海道ろうきん社会貢献助成制度を得て「北海道ひきこもり当事者連絡協議会設立事業」として神奈川県ひきこもり経験者である丸山康彦氏を講師として招聘した記念講演を開催。これを受けて「道産こもり179大学」をオホーツク圏で開催予定。

また平成28年度北海道社会福祉総合基金の助成を得て「北海道ひきこもり当事者会協同実践型地域連携活動促進事業」を道内の4当事者団体である、旭川「NAGAI」、帯広「リカバリスポット」、函館「樹陽のたより」、札幌「SANGOOの会」が協同して、ひきこもり理解啓発と社会参加促進を図る「北海道ひきこもりワールドカフェin旭川」（仮称）等を11月に旭川市で開催する。

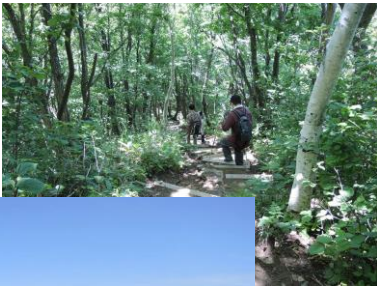
「当事者参画型ひきこもり支援者養成研修プログラム開発モデル事業」を開催

平成28年度公益財団法人日本社会福祉弘済会社会福祉助成金事業として実施する「当事者参画型ひきこもり支援者養成研修プログラム開発事業」では、ひきこもり当事者が本当に求める支援者養成研修プログラムの開発を実現するため、プログラム試案検討会で協議を重ね「当事者参画型ひきこもり支援者養成研修プログラム開発モデル事業」を10月30日に開催する。講師には、宮武将大氏（一般社団法人hitotoco代表理事）割田大悟氏（ひきこもり当事者グループ「ひき桜」in横浜代表）坂本凌雲氏（ひきこもり

ブレイス多摩代表）泉翔氏（NPO法人ウィークタイ代表理事）酒井一浩氏（リカバリスポット代表）吉川修司（当NPO理事）を選出し六名によって行う。

盛夏の三角山→大倉山散策地域めぐり登山

7月11日、当事者会SANGOOの有志メンバー4名で「盛夏の三角山→大倉山散策地域めぐり登山」（写真）を実施しました。三角山ルートはさまざまありますが今回は宮の森から入山し「望洋山道」六、七、八の坂と急な坂をひたすら歩き山頂に到達。その後、8番ルートから尾根をつたって大倉山に移動しました。この先には奥三角山（三五四m）や小別沢口があります。道も狭くなかなかスリルある登山を経験できます。約3時間の行程を歩き、ときより吹くさわやかな風が心地よさを感じさせてくれました。（田中敦）



（写真上）三角山散策路をひたすら歩く参加者（写真下）大倉山展望台から札幌市内を見渡す

SANGOOの会の近況報告

新年度4月に入り障がい者枠で正社員として就労が決まったメンバーや新たな進路を目指して勉学に励むメンバー、そして生活困窮者自立支援制度を活用して就労訓練を続けるメンバーなど新たな動きをみせるSANGOOの会は、平均8名前後の当事者が参加している。女性も平均2名参加しており少しずつ増えることが期待される。

毎回のテーマ毎の話し合い、5月のテーマ「自分にとって大切なもの」では、「健康」と答える人が多く、病気になるったら経済負担が大きくなるから健康には気を遣うという意見が率直にだされたほか、「その日をどう生きるか」「弱さを認める勇気が大事」という貴重な意見や「お金」という切実な現実の家計を訴える意見が見られた。これら当事者が発する言葉一つ一つは受け止められていく必要があると感じる。

その一方で以前ある当事者は「お金は後からついてくる」と語っていたことがあったが、迫りくる不安や目の前のNPO活動から安易に逃げるだけでは生活状況は変化していかない。当事者一人ひとりが今できることを継続していくことで誰かの目に留まり、道が開かれることがありうる。本州の当事者から「自助会活動をしていてことで就職が決まった人もいる」という以外と知られていない話を聞いたことがあるが、一見「何をしているのか自分」という役割や経験でも実は社会につながるためには必要なものであったということは多々あるのではないかと例会活動を通して改めて感じるものである。

平成27年度札幌市オンブズマン活動 状況報告書を公開

札幌市民の声を市政に反映して、透明性の高い行政、まちづくりを進めるために設けられた行政監視機関・オンブズマンによる平成27年度の活動状況が報告書として公表された。

報告書では、推計1万～2万人いるとされる札幌市のひきこもり対策について、平成26年度、市に寄せられた相談件数が全体の1.9%に過ぎず、これまでの相談支援体制が充分ではないと指摘。ひきこもり当事者が親とともに高齢化する現状の把握のためにさらなる実態調査を行い、昨年度設置された札幌市ひきこもり地域支援センターを中心にして、保健所、病院、民生委員児童委員、当事者会、家族会、社会福祉協議会・ボランティアセンター、区の保健福祉課、地域若者サポートステーション、NPO団体などと連携して個々のひきこもり当事者の特性や状況に応じた支援の必要性を示唆した。

また当NPOに対するヒアリング調査で、田中敦理事長の著作「苦勞を分かち合い希望を見出すひきこもり支援」で述べられていた支援のあり方についても言及。アウト・リーチ支援方法の確立、ひきこもりピア・サポーターの活用、当事者の居場所設置と運営、親亡き後のセーフティネットなどの必要性を提示し札幌市に回答を求めた。

札幌市は、ひきこもり実態調査を平成30年度中に検討。札幌市ひきこもり地域支援センター開設から半年が経過し、全相談者数に占める40歳以上の割合が約2割に達していることから、ひきこもり専門の相談窓口として一定の機能が果たしていると述べ、今後も地域支援センターと関係機関がネットワークを活用し、ひきこもり当事者個々の特性や状況に応じて適切な支援を行うと回答した。

報告書は札幌市のホームページから閲覧が可能である。

<http://www.city.sapporo.jp/ombudsman/index.html>

訪問支援と手紙によるアウト・リーチ 支援「北方ジャーナル」で紹介される

報道・評論誌「北方ジャーナル」に連載中の「ルポ『ひきこもり』長期高齢化の周辺」で、当NPOが実施しているひきこもり当事者宅への訪問支援とピア・サポーターが当事者宅へ絵葉書を送る手紙によるアウト・リーチについて取り上げられた。

「北方ジャーナル6月号」では、吉川修司理事が訪問している当事者宅で当事者の母親と取材を受けた内容が掲載。

小学6年生のときに受けたいじめがきっかけで不登校になり、高校を卒業後10年以上ひきこもっている家庭への訪問支援は2年半に及ぶ。記事には、この間に当事者がどのよう

な支援を受けてきたのか、また支援を受けている母親の想いが綴られている。

続く「北方ジャーナル7月号」では、いち早くひきこもり経験を持つピア・サポーターの活動を実践してきた当NPOが、地域に向きひきこもりで悩む家族たちを掘り起こすため開催してきた「地域拠点型アウト・リーチ事業」で活躍したピア・サポーターの意義や、5年間続けて旭川へ出向き、現地の親の会と協力して当事者会を設立する過程に触れた。さらに対面援助が困難なひきこもり当事者に対し新たな試みとして昨年度から実施してきた「手紙（絵葉書）によるアウト・リーチ」について詳細がまとめられている。

6月号では、長くひきこもりの取材を続けてきたライターの武智敦子さんが「ひきこもりから脱したいと願うのは当事者本人。その気持ちを伝える経験者が対話を重ねながら優しく肩を押すピア・サポーターの存在が重要だ」と述べている。



北方ジャーナル7月号ルポの見出し
「見返りを求めず、緩やかにつながる」

利用者同士で話し合える場から次の一步を考える とまこまい若者サポートステーション

はじめまして。とまこまい若者サポートステーションのスタッフをしています藤井です。3年前までは札幌に住んでいまして、2007～2011年くらいまでの期間、SANGOの会に参加させて頂き、こちらの会報の文章を書かせて頂いたこともありました。もしかしたら「お久しぶり」な方もいらっしゃるかもしれません。

『若者サポートステーション』（以下サポステ）とは、15～39歳の方を対象に仕事に就くにあたって「何をしたらいいかわからない」「どう考えていいかわからない」といった具体的な就職活動の前段となる部分をスタッフが一緒に考える形でサポートを行なう機関です。わたしが所属する苫小牧以外に道内には旭川、函館、札幌、釧路、岩見沢、北見といった各地にあります。

私がサポステの仕事を始めてから、この5月で3年目になります。自身の至らなさに反省するところは多い一方で、スタッフ個々人の能力だけではカバーできない課題にも気付かされています。

就職とは労働者と企業のマッチングというのが本質で、そこには社会構造の影響があります。例えばラーメン屋で働きたいという労働者側の要望があったとしても、ラーメン屋の需要があるか、あったとして人手が足りていないかといった「受け皿」がなければ、労働者側の個別のやる気があっても働くことはできません。そして社会構造は地域によっても違う。例えば札幌と苫小牧では仕事の数や仕事の内容が異なります。また採用自体はスタートに過ぎません。就職の本質は採用後に仕事を継続できるかどうかにあります。そう考えたときに、例えば苫小牧の場合、左右（東西）に細長いという地理上の特性や公共交通機関が札幌と比べて充実していないといったことにより、通勤しづらさという課題が出てきます。また仕事の継続を考えたときにプライベートの充実具合というのも重要なポイントです。公私のメリハリがあってこそ仕事の継続ができる。そういったときにプライベートの時間を充実させるための社会資源が地方は札幌と比べると少ないという課題があります。そこをカバーするのがインターネットではありますが、その環境を整えて維持するためにもコストがかかります。無収入の状態では難しい話でしょう。だからこそ社会資源が問われる。このことは地方に行くほど、苫小牧よりもシビアなものになっていくでしょう。

就労を継続という観点まで広げて考えたときに、ただ採用までの「就活」だけに着目しては事足りないですし、社会資源というところにまで視点を広げる必要があります。

サポステ勤務3年目に入り、個別面談を任される機会が増えてきました。また、今年度からの方針として、これまでのレクリエーションメインの体制から、利用者間で話し合う場（ちょうどSANGOの会のような）を増やし始めています。そういった中で利用者さんと直に話す機会が多いのですが、大半の皆さんから「具体的に動く前に他の人と話をしたい」という要望を受けます。自分を知りたいという欲求がある。しかしそれは自分一人では散々やってきたわけです（利用者さんにはひきこもりを経験した人が多いです）。散々やってきてそれでもわからないから、ようやく外部に出る気持ちになった。他の人と会話をして、相手から返ってきた言葉をソナーのように使って相対的に自分を知りたいという欲求にシフトした。この段階では、まだ具体的に働きたいという段階ではないわけです。しかし世の中は、家から外に出たのなら働きなさいと要求してくる。ここに噛みあわなさがある、ということにサポステの仕事をして改めて気付きました。

サポステ利用者さんの今後の社会参加にあたって、この「話し合う場」というフェイズが必要であるのなら、そこをサポステとしてカバーできないかという模索を今しています。幸いなことに、ここに理解を示す企業家さんもいて、先日は白老青年会議所の皆さんが「若者の本音を聞きたい」ということで、利用者さんと同じテーブルで話す場をセッティングしてくれました。

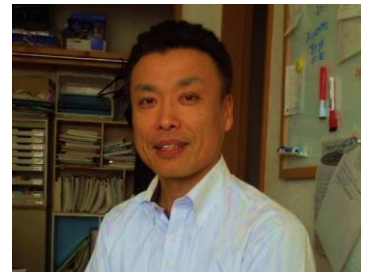
また、このことをサポステ自体からも発信しようということで、6月26日に苫小牧サポステ発表会『働く「壁」のこわし方』を開催しました。タイトル決定・チラシ作成など準備段階からサポステ利用者さんが関わってくれて当事者からの主体的・自発的発信の試みのひとつとなっています。各取り組みの詳細は苫小牧サポステのホームページをご覧ください。<http://tm-saposute.roukyou.gr.jp/>

（とまこまい若者サポートステーション就労支援員・藤井昌樹）

こころカ・プロダクション

JR平和駅を降り連絡通路南側の出口から徒歩7分、閑静な住宅街の一角に就労継続支援B型事業所「こころカ・プロダクション」がある。事業所玄関にはフクロウをモチーフにした看板が掲げられていた。内部は二階建ての一般住宅を事業所としているため家庭的な雰囲気が醸し出されていた。取材者が訪れたとき、スタッフを合わせると20名ほどの人員が集まり、午後から始まるカリキュラムのミーティングが行われていたが、利用者の方々から「こんにちは」と気さくに挨拶をいただいた。

「こころカ・プロダクション」は、北海道、札幌市2つのひきこもり地域支援センターや、ひきこもり外来と精神科デイケアを併設する「こころのリカバリー総合支援センター」を設置する公益財団法人北海道精神保健推進協会が運営し、2014年6月に開所。現在15名の登録者があり、常勤、非常勤を合わせて5名（全て有資格者）のスタッフで運営されている。障がい者のようなマイノリティーの立場から多様な情報を発信していきたいという構想のもと事業所が開始されたが、サービス管理責任者で精神保健福祉士の橋本達志さん（写真1）は、「放送番組の制作や映像をつくるような事業所は全国的にも珍しく、お手本になる事業所もほとんどなかったため、手探りの状態からはじめました」と発足当時を振り返り、手探りで始めたからこそ利用者とスタッフが一緒に考えよりよい仕事づくりを目指している。



（写真1）橋本達志氏



（写真2）明るい室内の作業室

事業所では、障がい者の立場からその特性や課題を外部に伝えていく試みも数多くこなしてきた。取材日の翌日には6名の利用者が専門学校の授業で、学生向けにプレゼンテーションが行われるため、その打合せが1階の作業室で行われていた（写真2）。発表者で発達障がいを持つ利用者から、その特徴として『社交辞令を交わすことが苦手』『仕事に集中すると時間を忘れてしまう』などが挙げられ、スタッフがその言葉をパワーポイント用のスライドに打ち込んでいた。利用者がより良いプレゼンテーションにするための工夫を凝らし、積極的にアイデアをだしていた姿が印象に残った。

仕事上の躓きから11年間ひきこもった経験をもつ利用者のAさんは、障がいを理解してもらうための寸劇で役を演じた時を振り返り、「どんな風に演じれば観ている人たちが笑ってくれるかを考えるようになった。とても楽しい」と話してくれた。橋本さんは「今まで負のイメージが強かった障がいを当事者自身が媒介者となり、その課題を相手に伝えていくこともメディア事業所としての役割」だと述べ、今後も大学や福祉関係者へ向けての体験談発表や、メールマガジンで利用者の意見を反映させることにも力を注ぎ、町内会などのお祭りなどのイベントにも参加して事業所の存在を知ってもらい、メディア事業所の利点を活かし地域に貢献し発展させていきたい」と抱負を語った。

北海道精神保健推進協会理事長で精神科医の阿部幸弘さんは、3年に及ぶ事業所での活動を通して「自身の障がいについて問題意識を持つ仲間とともに作りあげていくことが大切」と述べ、最初はたどたどしく受け身で仕事を行っていた人たちが、集団の力動性により利用者個々人の資質や力量を上げ、独自に創意工夫を始めるようになるプロセスの重要性を述べた。さらに「日本人に不足がちなメディアリテラシーを高めていくためにも当事者自身が情報を発信する側に立つことで、専門家には表現できない当事者の真実の姿が伝えられるはず」と今後の事業展開に期待をかけた。



（写真3）阿部幸弘氏

2016年には、厚生労働省「障害者の技術向上支援に係るモデル事業」として「広報力アップセミナー」を「こころカ・プロダクション」が企画し2回にわたり開催した。セミナーの様子が収録されている映像制作も手掛け少しずつ実績を残している。「仕事の一つひとつの実績が外部と接点を増やし次の仕事につながるため、色んなところから声をかけてほしい」と橋本さんは関心ある人たちに呼びかけている。（問い合わせ先は7ページを参照）

当事者が語る家族のあり方

自分を知り、他人を知る（後篇）

小西 恵司

人の心を決めるのは内容そのものより、全体を見渡した時に感じ得た、内容の移り変わりとその時の人間の動機だと思う。例えば、従順に子供を動かすことに満悦しておきながら、都合が悪くなるというの間に、「自分で決めて自分で動け！」と内容を急転させる出来事が思い付く。事実、私もこんな場面を何度も経験したが、何が辛いのかと言えば、内容ではなく、今までとは真逆な方針をいとも簡単にぶつけてくる軽率さに対してである。

「他人の言う事を聞いて、苦勞を積み重ねるのが人生だ！」と誇らしげに吠える者が、手のひらを返して「すべてを自分で決めるのが人生だ！」と……。同じ他人が、今まで従順な姿勢を表わし都合よく動いてくれた人を、都合が悪くなると完全否定するのだ。

「私」を奪われ、他人の言いなりになるのは心情的に物凄く辛いことである。だから反抗期がやってくる。しかし反抗を、（都合が）悪いことだと考える親側は反抗自体を悪と考え、殺処分をする勢いで厳格さに拍車をかけてしまふ。気付けば知らぬ間に、子供を見えないロープでグルグル巻きにしているのである。

そんな中で子供は、従順の先にいつか幸せがくる……。苦勞した先に幸せが待っている……。と錯覚し、一縷（いちりゅう）の望みを持ちながら自分を支えている。だがこの一縷すら切れてしまえば、後の行く先は心の疲弊か、絶望を通り越した無気力である。私の過去は、まさにこれだった。従順な姿を達成した私をさらに否定する、悪びれぬ親の姿があり、更には、家族同士の人間関係も、家計的なお金の問題も破綻の道へ突き進んだ。しかし人間は面白いもので、すべてを失って初めて自分を振り返り、自分を自分で変えようと腹をくくるようになる。否が応でも自分に気付くチャンスが到来するから、満更不幸とも言えないのである。

どの道、大事なのは一人ひとり、他人へ影響を与える自分の姿をどれだけ冷静に見つめることができるのかであり、何が正しいのか、という単純な判断で人へ圧力をかけても、抱える事情に決着を付けることなど到底できない。大震災で「絆」という漢字が流行したが、目に見えぬ繋がりを共感できたのであれば、自分と他人はどこかで繋がりが、自然と影響を与え合っていることが分かるだろう。自分から流れ出る要素に気付き、見直すだけで他人が変わる可能性が無限に広がっていることは、必然的に理解できるはずである。

Q. 中高年ひきこもりのわが子をもつ親です。最近、ささいなことで突然親に怒りをぶつけ、とても苦痛に感じることも多くなりました。大人としてそろそろ親のことを理解してもらいたいのですがうまくいきません。今後親はどうわが子と向き合って生活していけばよいでしょうか？

A (ピア・サポーター吉川修司)

ひきこもり当事者は日々悩むことを無意識に避けるためインターネットやゲームなど趣味を行うことで気持ちを保たせている側面がありますが、時には身近にいる家族に怒りの矛先を向けることは充分考えられます。十代ならともかく、成人期を過ぎた中高年でもそのような態度を示せば、親はどうしても「このありさまでは」と嘆きがちになります。できるだけ感情論で物事を考えない冷静な対応が必要です。

ひきこもりは、当事者だけに責任があるのではなく現在の社会構造や労働事情も大きく影響しているため、その背景を親自身が知ったうえで当事者との向き合うことも必要です。くれぐれも親の価値観だけが正しいとは思わないでください。「傾聴」という言葉があります。真摯に相手の言葉に耳を傾けて当事者が辛かったのであれば、その辛さをできるだけ共感しようと努力してください。努力する姿が当事者に

みえてくれば、少しずつ態度が柔らかくなるかもしれません。一番いけないのは上辺だけの共感です。

四十代を過ぎ長期間ひきこもり続ける当事者は、一般社会で生活するために必要な常識が失われ、社会参加する気持ちの後退することが考えられます。外部との接点がなくひきこもる生活が続けば、当事者の怒りや苛立ちが生じてくるのは当たり前です。一方、親自身も高齢化して親の死後、わが子の行く末を悩むことも事実です。そのような親の立場を子どもに理解してもらいたい気持ちもわかりますが、怒りをぶつける子どもにそれを求めるのではなく、まずは親が子どもを理解してあげる態度を示してください。相手からの見返りを求めない態度。そのような親の度量の広さが子どもを安心へと誘い、本音を出し合える対話ができる土壌をつくりだします。

基本的に親は子どもに対して「いいかげんに働きなさい」など指示命令、叱咤激励するのではなく、現状で悩んでいる子どもをそのまま受け入れることが肝要です。そのうえで、親がひきこもりの家族会に参加してその悩みを他の親たちと共有し、親自身の抱えるストレスを軽減しながら、個別に病院など専門機関に関わってください。家族会と専門機関の両方に対応してもらうことがとても重要です。

**就労継続支援 B 型事業所こころカ・プロダクション
(5 ページに紹介記事)**

住所：札幌市白石区平和通 15 丁目北 13-18

TEL/FAX：(011) 827-9772

E-mail：kokopro@kokoro-recovery.org

HP：http://www.kokoro-recovery.org/kokopro/index.html

アクセス：JR 千歳線「平和」駅で下車。徒歩約 10 分

地下鉄「南郷 18 丁目」駅で下車。徒歩約 20 分

こころのリカバリー
総合支援センター
(札幌市白石区平和通り
15 丁目北 13-18) から
徒歩 5 分です

札幌市ひきこもり地域支援センター出張無料相談会のお知らせ

札幌市内に在住で、ひきこもりの状態にある方とその家族を対象にした出張無料相談会が下記の通り実施されます。来年 1 月以降、豊平区・西区で開催予定。

開催日	会場	住所	対象地域
9月3日(土)	中央区民センター	札幌市中央区南2条西10丁目	中央区・南区
11月5日(土)	東区民センター別館	札幌市東区北10条東7丁目	東区・北区

開催時間：午後 1 時 30 分～4 時 00 分

相談希望の方は事前申し込みが必要です。詳しくは、札幌市ひきこもり地域支援センター（こころのリカバリー総合支援センター内）（TEL011-863-8733 相談専用）までお問い合わせください。

**ちいさなサポート ちいきのサポート
ちいサポ**

「不安・困りごと・職場の悩み・誰かに聞いて欲しい」そんな方、お電話ください。

相談日： 毎週土曜日 17:00～22:00
(最終受付 21:30)

相談料： 無料 (おひとり様 30 分程度)

TEL 050-1205-4321

応援クリックをお願いします！

NPO 法人レター・ポスト・フレン相談ネットワークでは、みなさまからの寄付など支援をお待ちしています。

インターネット応援サイト gooddo (グッドゥ) のページ内からも支援いただくことが可能です。ワンクリックで団体に課金されるシステムです。ご支援よろしくお願いします。

<http://gooddo.jp/gd/group/letterpost/>

私たちの仲間になりませんか 会員募集をしています

レター・ポスト・フレン相談ネットワークは若者の範疇に入らない成年・壮年期のひきこもりへの対応に軸足を置きながら、ひきこもり当事者が社会に出たとき、自信や希望を持ちながら歩めるような新しい働き方を、当事者自らが創造しています。

ぜひ多くの方々に、私たちの活動の趣旨を理解していただき、ひきこもり当事者が自信をもって生きていくことのできる、新しい社会のあり方をみなさんとともに追求していきたいと考えています。

会 費

正会員	賛助会員	寄付金
入会金 1,000 円	入会金 1,000 円	一口 1,000 円～
年会費 3,000 円	年会費 2,000 円	

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO 法人 レター・ポスト・フレン相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail: info@letter-post.com

◆「SANGOの会」例会のご案内

2016年7月、8月は下記日程にて行ないます。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、事前に事務局までメール、電話で問い合わせのうえ初心者の例会にお越しください。

《通常例会》

と き：7月26日(火) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター 4階 視聴覚兼会議室

と き：8月22日(月) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター 4階 第二会議室

《初心者例会》

と き：8月8日(月) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター 4階 ボランティア活動室

場 所：札幌市中央区大通西19丁目 (地下鉄西18丁目駅下車徒歩5分)



◆ 全国障害者問題研究会北海道支部より学習会のご案内

全障研北海道支部第38回夏季学習会が2日間にわたり開催される。1日目は、中部学院大学教育学部教授・日本臨床発達心理士会東海支部長・別府悦子氏の基調講演「発達障害の人たちのライフサイクルを通じた発達保障」。2日目は講座と分科会が開催され、シンポジウム「発達障がいや精神的困難を抱える子ども・青年への教育的支援はどこまで進んでいるか」では、別府悦子氏のほか、二本松一将氏(札幌学院大学生)、田村千波氏(SSW)とともに田中 敦理事長がシンポジストとして登壇する。コーディネーターは二通 諭氏(札幌学院大学人文科学部教授)

と き：①8月27日(土) 午後6時15分～

②8月28日(日) (詳しいタイムテーブルは、お問い合わせください)

会 場：①札幌エルプラザ大研修室 ②札幌学院大学

住 所：①札幌市北区北8条西3丁目 ②江別市文京台11番地

事前申し込みが必要。参加費あり。お問い合わせは全障研支部事務局下記アドレスまで
zensyoken_doushibu@yahoo.co.jp



◆ 平成27年度事業の成果物発行のご案内

「北海道中高年ひきこもり就労準備支援事業・理解啓発リーフレット」(平成27年度公益財団法人北海道新聞社福祉振興基金助成金事業)

A4判中綴じ製本フルカラー・全8ページ

「ひきこもりピア・サポーターによる手紙を活用した効果的なアウト・リーチ実践研究 報告書」(平成27年度公益財団法人日本社会福祉弘済会社会福祉助成事業)

A4判モノクロ平綴じ製本・全22ページ

「在宅ケアにあるひきこもりの家族関係修復事業 ひきこもりリフューチャーセッション報告書」(平成27年度公益財団法人フランスベット・メディカルホームケア研究・助成財団助成事業) A4判モノクロ平綴じ製本・全28ページ

部数には限りがあります。希望者には郵送料(500円)で受け付けます。また、道内の電子書籍出版社(電子書籍の本屋さん ドゥーパブ)でも無料で閲覧できます。<http://dopub.jp/>

☆ 編集後記 ☆

快適な盛夏の北海道を迎えています。本誌では当事者や家族からの質問Q&Aコーナーを前号から開設しています。専門家が回答するのではなく当事者目線に立つことが可能なひきこもりピア・サポーターが担当しています。ご質問してみたいと思われる相談内容があればぜひ事務局までご連絡ください。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください